

国鉄マンの

キンシャサ日記

片瀬貴文著

国鉄マンの
キンシャサ日記

片瀬貴文著

交通協力会刊

著者略歴

大阪府

昭和5年11月、~~富山県~~に生る。28年京都大学工学部土木工学科卒，同年国鉄に入り，国鉄パリ在外事務所，東京南局施設部長，外務部勤務（国際技術協力のためザイール共和国へ派遣）等を経て，現在，大阪工事局長。

初 版 昭和55年 4 月28日

第2版 昭和55年 5 月26日

定 価 680 円

著 者 片瀬貴文

発行人 石神源助

発行所 (財)交通協力会

100/東京都千代田区丸の内3の4の1 新国際ビル

電話：(211)8414／振替：東京 6-58712

印刷所 静和堂竹内印刷(株)

はじめに

これから、世界の人びとが平和で楽しく生き続けてゆくには、国際の交わりが、ますます大切になってゆく。それも役所ベースのきれいごとの外交といった段階にとどまらず、国民の一人一人がお互いどこまで共感し、理解し合えるかがより基本であろう。将来に向かってこのような交わりがうまくゆくかゆかないかが、人類の運命に大きくかわってくると思われる。

とりわけ日本は、国際の交わりの中でなければ一日たりとも生きてゆけない体質になっている、この傾向は、これからも助長されよう。

幸い、私は、国際協力のため、ザイル共和国に滞在した折に、国境を越えて、異民族間にごくまで共感・理解が可能かについて、ささやかだが夢のある試みを体験することができた。

しばらくの間、皆さんも一緒に、ザイルの人たちの汗とピリピリの香りでムンムンした熱気にあふれた町、南緯四度、サバンナの二〇〇万都市キンシャサの一住人になっていただくことができれば、幸いこれに過ぐるものはない。

昭和五十五年四月

目次

はじめに

第一部	ザイール	1
-----	------	---

三度目のザイール	2
----------	---

歴史の中で	3
-------	---

ザイール共和国

はじめての鉄道	7
---------	---

ザイール誕生	8
--------	---

首都キンシャサ	10
---------	----

第二部	出発を前にして	13
-----	---------	----

苦惱 14

決意 17

出発までの二カ月 20

借款不足 国内の体制整備 大切な情報交換 ザイール交流協会

発足 ザイール応援団 派遣者の悩みと希望 待遇改善 押し

付ける協力 理解し理解させる 言葉のハンディキャップ 通

訳 家とクルマ 荷物発送 出発直前

日本の発展とともに歩んだナンティ 48

肉とサラダ サラダの材料 「ナンティ」とよぼう ナンティは

手段だ

第三部 キンシヤサ到着 63

行動開始 64

密かに入国 事務所開設 仮住い アパートに裏口入居 ボー

イ クワマ 元鉄道局長マホロ 局長事務取扱 ミーティング開

始

JARTSの調査契約	87
赴任途中に契約成立	
運輸大臣に面会	
主席参事官交替	
国民路線構想	95
生活の基盤	100
マタビシ	
ビールの味	
パンク	
通貨	
日本大使帰国	105
借款不足	
OEBKのザイール人	
総務課長候補採用	
ザイール運輸省	111
多事多難	115
ナンテイに取り組む	117
準備委員会発足	
ンボイ	
活躍	

第四部

OEBK	121
ザイールの鉄道	122
ザイール国鉄	
バナナーマタディ鉄道建設計画	
ザイール河橋梁	
日本国鉄との付き合い	131
調査団派遣	
激しい技術協力競争	
OEBK設立	
JARTS	

事務所を開設

ザイール化運動……………142

その国土 銅と電力 フラフラになるフラフラ ザイリアニアシ

オン ザイールのフランス語

プロジェクトの背景……………151

自国内輸送ルート JARTS 撤退 豪雨

芽生えたナンテイ……………158

まずまずの体調 コミュニケーション スポーツ部長ムスンガイ

お披露目準備 始球式 ハプニング トラブル続出 パترون

依存からの脱出 ビッグ・ニュース ナンテイのメッカ 広報誌

発行

第五部 プロジェクト難航……………177

乾期きたる……………178

日本人会 手段としてのプロジェクト ルート代替案 ンポイ

総務課長に ザイールの赤ちゃん カタセ誕生 ザイールの外国

人 豊かさの中の貧しさ コート整備 真剣なプレーヤー 審

判 盛況の映写会 決勝戦 コート造り プロジェクト再検
 討 採用試験 記憶力減退 正確で速い ロコミ情報 「ナン
 テイ」 公認

雨期入り

..... 209

花の王者 火炎樹 アフリカの味 バイナップル フランスの動
 き 調査開始 会計検査 ザイル人の内紛 世銀の動き
 早朝ゴルフ ユマの新居 バス代打ち切り リーダー探し ナ
 ンテイ 中学校へ 協会公認 フナコートの専用席 借金
 プロジェクト停滞..... 231

孤軍奮闘 管理費配分をめぐるいざこざ 権限委譲 ンボイ 解
 雇 正月 ユンボ 世界選手権招待 トラブル発生 テニス
 マンとの対立 世銀専門家の申し入れ 自動車事故 不振の農
 業 輸送力増強 コート上のトラブル 日本からの応援 常勝
 ビタ敗れる 日刊紙にナンテイ登場
 プロジェクト始動前..... 264

虚々実々 熱病と戦争 マジョルカでの休暇 内閣改造 外国
 人との限界 プロジェクト危機へ

第六部

根付いたナンテイ……

279

見本市トーナメント 自分たちの手でコート造り 大臣の注文
 戸過器 つまみ食い ナンテイ国外へ 大会場を二カ所に 先
 生トリオ マスダクラブ 日本・ザイル対抗戦 四人目の運輸
 大臣 ベルギー人とフランス人 日本留学 派遣者の心構え
 新しいリーダーたち ニュースキャスター・カボンゴ登場 ナンテ
 イ第二の核 拡がりみせる日本からの応援 審判講習会 企業チ
 ーム

第七部

プロジェクトは人だ……

321

ザイル政府 方針決定 野菜作り 素晴らしいザイル人 物
 価高 マニョック 調査団来訪 早朝ゴルフ再開 ビタ再び優
 勝 考えるテニス 雷コーチ ザイル人の中の日本人 カタ
 セトーナメント 内からの目 精神力と体力 プロジェクトは人
 だ 愛される日本人 資源小国ニッポン プロジェクトその後

あとがき

第一部
ザイール

ザイールの首都キンシャサ



三度目のザイール

夜明けの空が白みはじめた。

夜半、人気のない吹雪のブラッセル空港を飛び立ったサベナ航空DC-10機は、七時間、ひたすらに南下を続けた。月のない暗黒の空を、アトラス山脈を越え、サハラ砂漠を縦断し、そろそろ赤道を過ぎたころだろうか。やがて飛行機は、次々と現われる雷雲の峰を避けながら徐々に高度を下げていった。ほの白い空にそびえ立つドス黒い雷雲の峰は、時どきフラッシュのように、まぶしく光った。南半球は、いま、雨期の最中なのだ。

飛行機は、綿のように見えていた雲の中に突っ込み、一瞬、機内は、うす暗くなった。あと僅かでキンシャサに着く。

私は、次第に心が締めつけられてゆく感じがした。いままでの、二度の訪ザと違って、ずっしりと重々しく、粘っこく、体中が押さえ込まれ、身動きができなくなるような、緊張感にとりつかれていた。

どのように切り開いて行ったらよいものか。先行き皆目見当のつかない任務。その背後にある日本の、そして国鉄の重さ。アンゴラ戦争の余波で、治安の不穏が伝えられているキンシャサ情勢——その中に、私を待っている同僚たちの苦しみ。不慣れた風土での、二年間の独り暮

らし。

そういった不安が、次から次へと心にのしかかってきて、払いのけようとすればするほど、ますます重々しく絡みついてくるのであった。

ようやく抜けたと思ったら、またその下に雲があった。雲海を一層抜けるごとに、上空は暗さを増した。そして、三層目が終わった途端、眼下に黒々とした熱帯雨林のうねりが見えた。やがて、その黒いうねりの果てるところに、流域面積世界第二の、ザイールの大河が、視界いっぱいに水を湛えていた。

水は空を写し、薄紫に淡く光り、色といい、濁りかたといい、正に泥水そのものを思わせた。この大河を横切ったところ、そこがこれから私の住むべき国、ザイールなのだ。

夜来の雨が上がったばかりのンジリ空港。

その世界一長い滑走路に、飛行機は、一回大きくバウンドして、無事、着陸した。湿度と高温のために、窓はまたたく間に曇り、窓外の景色は何も見えなくなった。

歴史の中で

ザイール共和国

この国は、われわれにとって、比較的耳新しい。ベルギー領コンゴが一九六〇年（昭和三十

五年)、コンゴ共和国として独立、一九七一年(昭和四十六年)に国名をザイール共和国と改めた。まぎらわしいことに、コンゴという国は、もう一つあって、ザイールの北、ザイール河をはさんで国境を接する旧フランス領コンゴも、コンゴ人民共和国と称している。

ザイールの住民は、主な部族八〇余、細かく分ければ二〇〇余といわれるが、一方、ザイール河口近くのバコンゴ族は、同じ部族でありながら、アングラ、コンゴ、ザイールの三国にまたがって住んでいる。

最近の八十日戦役(一九七七年・昭和五十二年)にしろ、シャバ戦役(一九七八年・昭和五十二年)にしろ、一国一文化一民族のわれわれにとって、なかなか理解し難い面が少なくない。

ところで、アフリカの歴史の舞台に、ザイールが登場するのは、比較的近年になってからである。それは、古くからのヨーロッパやアジア対アフリカの交わりの中で、この国が影響の外にあり、そのころの歴史が残されていないからだ。

一四八二年(わが国の明応時代)、ポルトガル人ディエゴ・カムは、アフリカ西海岸を南下し、ザイール河口にロアンゴ王国を発見、ここにヨーロッパ人コロニーとキリスト教布教の種が芽生えた。

その後、優れた火器を持ったアラブ人による奴隷集めが奥地にはじまり、人口は急激に減少するが、ヨーロッパ人が内陸部に関心を持ちはじめるのは、植民地分割時代を迎えた十九世紀

になってからである。

一八一六年（文政時代）、イギリス人タッキーの率いる探險隊が、はじめて大西洋岸からザイル内陸部へ向かった。だが、その糸口で、悪疫のために十七人の犠牲者をだし、壮途は挫折してしまった。その後、しばらくの間、この国を含む赤道の周辺は、植民地分割の波から取り残された形となった。

一八六〇年代（安政時代末期）に至って、医学博士・博物学者であるとともに宣教師でもあったイギリス人リヴィングストンが、ザイル河（コンゴ河）の水源を求めて、インド洋岸から内陸部を西に進み、病気のため連絡が途絶。行方不明になってから、ザイル周辺は、再び探險の脚光を浴びるようになった。

一方、ウェールズに生まれ、当時、ニューヨークヘラルド新聞にあつて、探險レポートを得意としていたスタンレーは、行方不明になったリヴィングストンを搜索するため、彼の足跡を追ひ、一八七一年（明治時代初期）、タンガニカ湖畔ウジジで劇的な会見を果たし、帰国する。そして、この搜索行がきっかけとなり、彼自身、インド洋岸からザイル河源流を極め、大西洋岸に達する第二次探險を試みることになる。

さて、スタンレーの第二次探險隊は、一八七四年（明治七年）、ザンジバルを発し、ヨーロッパ人として、はじめてのザイル河下りに成功、出発から九九九日目にザイル河口のボマに到達、ザイル内陸部は西欧に対して、その未知の扉を開くことになったのである。その間、

部族との戦闘三二回、はじめ三四七人の隊員がボマに達したときは、戦闘と病気のために、一一人まで減っていた。

一八七七年、いまを去る一〇二年前の明治十年、西南戦役が終わり、官鉄神戸—京都間の鉄道が全通した年である。

ところで、スタンレーは、ザイル探險の成果を生国イギリスに帰って発表した、その反応は、案に相違して冷たかった。が、時たまたま、アフリカ進出の機をうかがっていたベルギー国王レオポルド二世に迎えられるところとなり、一八七九年（明治十二年）再度ザイルに派遣され、ザイル河口に近く開拓の基地ビビが設けられた。

この基地は、二年後の一八八一年（明治十四年）、ザイル河を五〇〇キロ遡ったレオポルドヴィル、現在のキンシャサに移された。

そのころから、アフリカ分割の最後の穴場として、ザイル周辺には、フランス・ポルトガル・ドイツ・イギリス等、欧州各国の列強が争って利権を主張しはじめたのである。

そこで、一八八四年（明治十七年）から翌八五年にかけて、一四カ国によるベルリン会議が開催され、現在のザイル共和国の地域は、実質的にはベルギー国王の私領であるコンゴ自由国として認められるところとなった。このときの国境線がいまも、そのまま国境として残っていて、アフリカ問題に一つの陰影を投じているのである。